

みかん栽培の広がり

明治時代になるとみかんの生産地はさらに広がり、生産量も増えてきました。また、みかんを運ぶ方法も鉄道による輸送がはじまり、やがてトラック輸送も行なわれるようになりました。これによりみかんは大都市や生産地の近くにとどまらず、全国のすみずみにまで届けることができるようになりました。みかんの生産にも大きな変化がおとすれました。

1940年代の太平洋戦争の影響で数年の間は生産量が大きく下がりますが、戦後はそれまで以上の勢いで増えはじめ1975年には生産量366万5,000トンに達しています。

また、1980年頃から一部の産地では、ハウスの中で冬に暖房し花を咲かせ、それまでみかんのなかった4月～8月に出荷するハウスみかんも作られはじめました。ハウスみかんは日光以外の生育に必要な温度や水をコントロールし、常においしいみかんを取ることが出来ます。このハウスみかんの登場により、冬に限られていたみかんを食べることのできる期間は大きく広がりました。

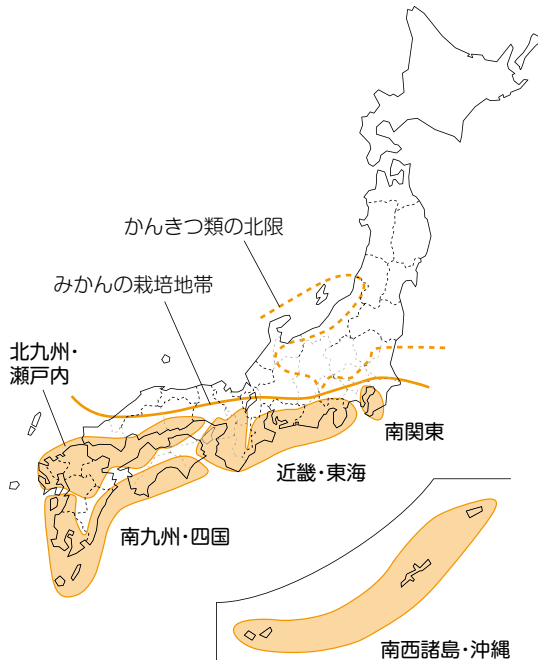
★みかんの産地をたずねる

みかんの生産に適した地域

みかんの生産は、とくに気候に大きく左右されます。みかんの木は、冬でも葉をつけている常緑樹です。おいしいみかんを実らせるには、年間の平均気温が15℃以上あり、冬の最低気温が氷点下5℃以下にならないことが条件です。さらに、おいしく作るには、8月から10月にかけて日照時間が多いことが重要です。このため、みかんの生産地は暖かい地方にかぎられています。全国のうち生産量の多い県は和歌山県、愛媛県、静岡県です。

また、多くはありませんが、栃木県や茨城県、新潟県の佐渡島でもみかんが栽培されています。

みかんの主な栽培地域



みかんの種類

みかんは、収穫される時期によって早いものから極早生、早生、中生、普通に分類されます。極早生の収穫は9月～10月、早生の収穫は11月～12月前半、普通の収穫は12月になります。極早生と早生は収穫してすぐに出荷されますが、普通はすぐに出荷されるものと、倉庫に一時保存(予措貯蔵)し出荷されるものがあります。出荷の早い極早生や早生は九州地域に多く、普通は近畿・東海地域で多く作られています。

全国的によく知られている品種には、日南1号(極早生)、宮川早生(早生)、南柑20号(中生)、大津4号(普通)、青島温州(普通)などがあります。最近では愛媛中生(中生)、ひめのか(中生)、あいさん(早生)といった品種も愛媛で新しく作られています。

みかんの生産出荷時期と産地

月	8		9		10		11		12		1		2		3		
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
南西諸島 沖縄	極早生			早生													
南九州・ 四国			極早生			早生		中生		普通							
北九州 瀬戸内			極早生			早生		中生		普通							
近畿 東海			極早生			早生		中生		普通							
南関東					極早生	早生		中生		普通							

愛媛県農産園芸課調べ

みかんは早く暖かくなる地方ほど、収穫できる時期は早くなり、南西諸島・沖縄では8月下旬から収穫されて出荷されます。

暖かくなるのが遅い南関東では、みかんの収穫時期は早生みかんでも11月からになりますが、普通みかんは翌年になっても収穫することができ、収穫したみかんを貯蔵して、3月まで出荷できます。

5月から出まわるハウスみかんを加えると1年12カ月のうち、4月をのぞく期間は、お店にみかんが並びます。

みかん以外のかんきつの種類

みかん以外のかんきつは収穫される時期や大きさ、形、皮の色など様々なものがあり、全部でいくつあるのか想像がつかないといわれています。平成23年産において全国で1,000 t以上の生産量のあったものだけで27種類あります。

愛媛県でもさまざまな種類が栽培されており、農家の人が販売する種類だけでも約41種類あります。

いよかん

いよかんは1887年に山口県阿武郡東分村(現在：萩市)の中村正路氏の畑で発見されたのが最初とされ、穴門みかんと呼ばれていました。愛媛県には1890年に松山市の三好保徳氏が山口県から苗木を買って植えたのが最初です。始めは伊予みかんと呼んでいましたが、うんしゅうみかんと間違えやすいためいよかんと改められ、愛媛県の特産品として県内で広く栽培されるようになり、全国の約90%を愛媛県で生産しています。

夏みかん

夏みかんは1700年頃山口縣長門市の海岸に流れ着いたかんきつの種をまいて育てたものが最初といわれています。明治以降全国で栽培されるようになりましたが、とてもすっぱい味が特徴ですが、しだいに消費者から敬遠されるようになり、他の品種への植えかえが進んでいます。現在栽培されている夏みかんの多くは、昭和10年に大分県津久見市の川野豊氏の夏みかん畑から発見された酸が少なくなるのが早い川野なつだいで、甘夏とよばれています。4月から5月頃に食べることができる、さわやかさが売りのちょっとすっぱいかんきつです。

はっさく

はっさくは1860年頃広島県因島市(現在：尾道市因島)の浄土寺の境内で発見されたのが始まりとされ、八朔(8月1日)頃に食べ頃となるため、はっさくと名付けられました。明治以降に広島県内に広がり、戦後全国で栽培されるようになりました。ほろ苦さと控えめな甘みが根強い人気の昔ながらのかんきつです。

ぼんかん

インドのスタラ地方原産の古い品種で、インド、東南アジア諸国、中国南部、台湾、日本などで栽培されています。日本には台湾から1896年に伝わってきました。南九州や愛媛県で多く栽培されています。果実は1月から2月に収穫され、とても甘い品種です。

不知火

1972年に国の果樹試験場^{くちのつ}口之津支場(現在：独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所カンキツ研究^{くちのつ}口之津拠点)で清見の花にぽんかんの花粉を交配して作られた品種です。とても甘く、ヘタの部分が出っ張った独特な形が特徴です。2月に収穫され、デコポンという商品名で売られています。

清見

国の果樹試験場^{おきつ}興津支場(現在：独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所カンキツ研究^{おきつ}興津拠点)でみかんの花にオレンジの花粉を交配して1979年に誕生した品種です。佐賀、愛媛、熊本、和歌山などで栽培されていて、3月に収穫されます。

みかんの木の一生

みかんの木は種をまいて育てるのではありません。まず、カラタチというみかんの仲間の種をまいて、カラタチの木の根元^{ねもと えんびつ}が鉛筆の太さぐらいになったところで、味のよいみかん品種の枝や芽^{ほぎ つ}(穂木)を接いで、みかんの苗木をつくります。この苗木を2年間ほど育てた後、みかん園に植えかえます。

みかん園に苗木を植えてから4～5年ぐらいでみかんがなりはじめ、10年ぐらいからたくさん実るようになります。みかんの木は90年ぐらいたっても実をつけることがありますが、もっとも多く実をつける働きざかりは15年～30年ぐらいたった木です。それから少しずつおとろえていくので、30年をすぎたころから若い木に植えかえられます。

みかんの苗木ができるまで



カラタチの種をまく



発芽したカラタチ



育成中のカラタチの苗



みかんの若木



畑に植付けたみかんの苗木



穂木を接ぎ、育成中のみかんの苗

★みかんづくりの一年

一年間の主な作業

みかん農家はみかんの木の生育にあわせた農作業やみかん園の管理など、一年をとおして、いろいろな仕事をします。芽がでる前にいらぬ枝を切り落とし(整枝・せん定)、くりかえし園の雑草をとったり(除草)、季節ごとに春肥、夏肥、秋肥といった肥料をあたえたりします。花が多すぎると大きなみかんができないので、むだな花をつみとります(摘らい・摘花)。7月からは大きすぎたり、小さすぎたり、傷がつくなどした実を手で取り除き(摘果)、実の数や大きさを調整します。また、病気や害虫が付かないように、薬の散布(防除)も行います。

最近では、より甘くておいしいみかんをつくるため、雨を通さない白い特殊なシートを地面に敷く作業(マルチ被覆)も行なわれています。